

中国人の宗教

張 愛玲

徐青訳・鈴木規夫監訳

この一文は、本来外国人のために書かれたものである。したがって、(中国人自身にとっては)とても薄っぺらなものに見えるかもしれない。だが、ときには初級教科書のように頭脳を単純明快にして、いろいろな問題を明白にすべきであろう。

表面的には、中国人に宗教があるとはいえない。中国の知識階級は、長期間に渡ってずっと無神論者であり続けてきた。仏教は、中国哲学への影響については、また一つ問題は残るが、普通の人々への教育上の影響においてその痕跡はあまり残こされてはいないようだ。なぜなら、それはすべてを疑うからである。中国文学の中には、とても大きな悲哀が瀰漫している。ただ物質の細部にのみ喜びを得られる——『金瓶梅』、『紅樓夢』の中には、細かく、まるでひとつのテーブルメニューを全部書き出したような悲哀があるが、それは倦怠ではなく、何のためでもなく、ただそうすることが好きであるからに過ぎない。——細部は往々にしてむつまじく楽しいのである。そうした細々とした記述は人を惹きつけて夢中にさせるが、あくまで主題は永遠なる悲観なのである。人生へのあいまいな観察の一切は、すべて虚無の方向を指示するからである。

世界中の人々にはともに似たような感覚がある。中国人が一般のものとは異なるところは、この“虚空の空虚、一切すべて虚空”の感覚が、いつもあたかも新しい発見であるかのようなものであるということなのだ。そして、その段階にとどまるのである。一人ひとりの中国人は、花が落ち、水が流れるのを見、風に臨んで、涙をこぼす。月に向かいしきりにため息もつく。生命の短いことを感じる。だが、中国人はここまでなのである。さらに、そこから進みはしないのだ。滅亡は不可避であろうけれど、中国人はそうだからといって、気が滅入り、絶望し、放浪して、貪婪になり、荒淫する

わけではない。——ヨーロッパ人にとって、これは実にロジックカルな反応である。まるで文芸復興時代のヨーロッパ人のように、いったん死後の永生を信じなくなると、もう大々的に楽しく騒ぎ、悪事を働く。てんやわんや、上を下への大騒ぎをするのである。

教育を受けたことのある中国人は、どこへ行くでもなく一年また一年と生き、どこへ行くでもなく人類は一代また一代と過ごすものだと思っている。そうであるなら、生きることにはいったい何の意義があるというのか？ 意義があるかどうかは別としても、いずれにせよわれわれは生きている。われわれがどのように我が身を処すのかとは、大した関係はない。よく生きることは、楽しいことである。だから、その楽しさを享受するには、規則を守った方がよい。その他には、慎重に空白を残しておく——その空白とは、まったくぼんやりしてはいるが、騒がしく神秘的で可能性に充ちた白い霧というのではない。一切の思想は、断崖に臨んでウマの手綱を引き締め断然停止するかのように止まる。それはまるで中国画の上部に厳としてある空白なのであり——、なくてはならない空白なのである。それがないと、画の均衡が崩れてしまうのだ。芸術においても、人生においても、最も得難いのは、いつ筆を擱くべきかを知ることである。中国人がもっとも自負するのは、まさにこの一種の約束の美なのである。

当然、下等な人々にはこのような興味は欠けている、希薄な空気の中では生きていけないからだ。彼らの宗教は、星相、孤鬼、精進料理を食べることといった、関連のないたくさんの小さい迷信によって組み立てられている。上等な人々と下等な人々とに共有の観念は、唯一祖先への崇拜であろう。しかし、これは知識階級にとっては、ただ単に純粹な感情作用でしかない。亡くなった人への孝を尽くすことであって、宗教上には何の意義もないといえる。

中国人の独りよがりな願望

しかし、よくよく研究してみると、われわれ中国人はみな、共通の宗教的背景をもっている。知識人と民衆との唯一異なるところは、知識人はすこし信じているが、あまり認めたくはないということであり、民衆は認めてはいるが、あまり信じてはいないということである。こうした曖昧な心

中国人の宗教

理的背景の大部分を占めるのは、仏教と道教である。道教後期の神仙と妖怪とも混合し、中国人の脳髓に何千年とかけて沁み込んできた結果、元来の仏教とは大きく異なったものとなっている。下層階級の迷信は、この広大なシステムから取り出された切れ端にすぎない——このシステムの全貌を確認した人は少ない。その大部分はあまりにもよく知られていることだからだ。民衆の迷信は、系統的でその宇宙観の一部である以上、いわゆる迷信とはいえない。

この宇宙観を宗教というカテゴリーに入れるべきであろうか？ 中国の農民に問いつめれば詰めるほど、その農民はかえって肯定できなくなる。せいぜい、「鬼はやはりいるでしょう。見たことはないけれども」、と言うことになる。知識階級は口では信じないという。実は、これは嘘でもないのだが、彼らの思想行動は、こっそりと宗教背景の色彩に染められている。なぜならば、信じてはないが、彼らは信じたいと願っているのである。本来、宗教の大半は、独りよがりの考えでしかない。ここでまず、中国人のその願望を見てみることにしよう。

中国人にとっての地獄

中国人には、道教の天国と仏教の地獄がそれぞれある。死後、一切の靈魂はともに地獄に行つて審判を受ける。つまり、キリスト教の地下火山のように、ただ単に悪人だけがそこで苦しめられているわけではない。われわれのあの世は、比較的空氣の通りも良いところである。「冥界」は、道理から言つても当然永遠に黄昏であるべきだが、ときとしてきわめてふつうの都市にも似ている。遊客の興味の集中するところは、十八層になっている地下牢の監獄である。生ける魂は穴から出て、地獄に漂流する。亡くなった親戚、友人たちと出會つて、彼らを地獄のいたるところへ観光に連れていくこともよくあることなのである。

鬼の形態については、たくさんの異なった伝説がある。比較的アカデミックな流派の理論では、鬼はただ人息が散らずにいるだけの存在で、その実体は氣體である。これを根拠としてみるだけで、グレーあるいは黒のシルエットが、風に吹かれるのに耐えられず、時間が経つにつれて次第にすり減っていくことが判ってくる。したがって、「新しい鬼は大きく、古

い鬼は小さい」。だが、群衆の理想はいつも写真のようなものへ傾いていく。そのため、一般的な鬼の化けの皮が剥がされると、それはいつも死者とまったく同じであるということになる。

あの世の警察は、亡くなった人の霊魂を捕えて、最高法廷で冥王が座っているところへ連行する。冥王の支配下の官僚は、有能でよく訓練された鬼の中から選ばれる。生きていた間に大いに善行がある囚人となった霊魂は、直ちに釈放される。そして、金のタラップを踏んで、天国に登っていく。地獄に残った罪人は、各種異なった性質の罪によって、各種異なる処罰を受けることになる。たとえば、汚職官吏は強引に大量の銅の溶液を飲み込まれるのである。

生まれ変わり

中間的な人々は、みな一緒に「生を受け」に行く。そうやって受けた生の一生の暮らし向きと境遇は、すべてその前世の素行如何による。よい人は富豪の家に生まれる。もし彼には絶対に欠点はない、というのでなければ、彼は富豪の家の女性として生を受けることになる。女性は男性よりもいつも苦勞が多いからである。もし彼が過去において品性のない人間であったなら、下等な人間として生を受ける。あるいは下等動物として生を受けることになる。食肉処理業者は豚となり、借金を返済してない人は牛馬となる。貸した人のために仕事をするのである。

「生を受け」去る前に、鬼たちはまず迷魂のスープを飲まされ前世を忘れる。そして、彼らは、歯がついた巨大な車輪に引っ掛けられ、その頂上にまで這い上がる。驚きうろたえて下を見ると、鬼たちが背後から後押しされて落とされている。産婆の手の中に落ちているのである。輪廻の言説は東方各国にある。しかし、中国のようにはっきりと、着実に仮想されているところはどこにもない。実際、尻の上に青い印のある子どもは、最初下に飛び落ちたくないため躊躇したので、鬼たちに足で蹴飛ばされた人なのだ。母親は、その子どもを揺らし、叩き、責めながら、こう聞くのである。「おまえは、そんなにこっちの世界に来たくなかったのかい!？」

法的手続の煩瑣

人は罪を犯し、罰を受ける。ただ、それは地獄においてかもしれないし、あるいは来世においてかもしれない。はたまた今生においてかもしれないのである。——不孝な息子は、自分の息子も不孝である。女中を殴る夫人は、背中に潰爛な皮膚病となる。場合によっては、そうした報いはこの世とあの世の両方で同時に発生することもある。ある人が地獄に見学に行くと、知り合いの夫人は鞭で打たれていた。彼女はきっと死んだのであろうと思ったが、いざ現世に戻ってみると依然として生きていた。だが、背中に瘡ができていたのであった。

逮捕と審判の法的手続は、永遠に、いつもの通りに処理されるわけではない。たくさんの訴訟事件で、ある人はある人を害して死なせたが、法廷は一切の儀式を全部免除して、被害者が自ら犯人を捕まえるということもある。霊魂が降りてくると、犯人は死者の声で話をする。彼自身が自分の秘密を暴露した上で自殺をはかるのである。これよりもっと直接的で痛快な方法は、天から雷に打たれることである。だが、罪が極めて大きな悪質な事件にしか適用されない。雷の神様は、罪名を犯人の背中に焼き記すのである。この「雷文」の標本は、収集され一冊の本にまとめられてかつて刊行されたこともある。

定まったものでもないので、陰の世界の行政はわれわれはさまざまな推量による解釈が可能である。したがって、中国における因果応報説には一分のすきもない。容易にその存在を証明できるのだが、それが存在しないことを立証することは絶対にできない。

中国の冥土と現世は極めて明白である。神秘的なところは何もない。陰の世界の法と掟は中国文明の法と掟と完全に一致する。人は人性に基本的に従うからである。あの世に間違ってしまうことがある。だから、亡くなった魂は地獄に行く前にしばしばその城隍廟を通じた予備審査を受けることになっている。城隍廟は、冥土の地方法院である。往々にして死んだ大官が城隍を担当させられるのであるが、『紅樓圓夢』の中で城隍となった林黛玉の父親の林如海のような事例もある）彼らには収賄の可能性がある。地獄の最高法院は比較的に公平であるとはいっても、よく帳簿調べを間違うことがあり、寿命が未だ満たされていないにもかかわらず逮捕

されるということもよくある。紆余曲折の末、過ちが明らかになると、その後、死んだ人の魂を、他人の死体を借りて生き返させらざるを得ない。なぜならば、原来の死体はもう片付けられていないからである。

中国人はなぜ棺桶について興味津津であるのか

死後、また別に生きを受けることができる以上、靈魂には身体との関係でも独立性を有していることが分かる。身体は暫定的な器に過ぎない。したがって、中国神学とエジプト神学とは異なっている。中国ではそれほど死体に注意を向けないのである。にもかかわらず、棺桶についてはなぜとても拘るのであろうか？ いくら面倒で金がかかっても、異郷でなくなった人は、千里はるばると棺を運んで、祖先の墓に埋葬するのである。中国の棺桶は、質が良ければよいほど重くなる。棺桶製造の本乗の意味では、4人から64人ほどで、またさらに多くの人で担ぐものもある。したがって、棺桶が移動中に停泊する家屋が、もし火事を出したりなどすると、当面の対処すべき問題は非常に具合が悪く労苦を伴う。死者の家族にとって、唯一緊急の解決策は、臨時に地上に穴を掘り、棺桶を適切に埋葬して、火事の危険から逃れることである。一般的に墓地はできるだけ暖かく、乾燥している場所を求めるが、もし墓地が湿っぽく、風があつて蟻が出るようなところであると、子孫の心の中には、とても濟まないという心情が生じる。そのため、風水の学が生じ、繁瑣となり、祖先の墓地の状況と環境が子孫の運命へ与える影響に関する研究を専門とするようになったのである。

中国では父母の遺体について過度な関心を持つ。これについての唯一の解釈は、中国では、人の子であるという感情が異常に発達しているから、というものである。中国人の伝統上のフィクションとしての親孝行の心がけは、偉大なものであり、一切を飲み込むことのできる一つの情熱に他ならない。それが唯一合法的な情熱である以上、その奇形的な発達、他の方面での平静さを失い、バランスを欠いている。模範的な息子は、食人種の熱烈な生贄方式で、尻の肉を切りスープにし、病気の両親に食べさせるのである。この類の行為は、普通であれば、狂おしく恋愛している人だけにしかできないものである。ここから類推すると、彼らは両親の死後

に安心して、心地良く過ごせるのかどうかといった関心に、実に神経質になっている。それは当然予測されることでもある。

中国人は自分のために棺桶を注文する。だが、その動機は必ずしも自分への愛着や我執のなせるわざだけなのだとは言えない。それは一つの現実的な遠い将来を見通した考えの反映なのである。農業社会の住民たちは、生活必需品の一切を蓄える。理の当然であろう。中国の富豪はいつも「米爛陳倉」と形容されている。その昔、比較的余裕のある時代には、死者に着せる着物（「寿衣」）、棺桶（「寿材」）は日常生活の必需品なのである。何れにせよ、必ずそれを使う日は来るのだ。

ただ、物質的にも亡くなった人の福利を考慮することは、完全に無意味なことなのではない。なぜならば、審判を受ける靈魂が生を受ける前に、もしかしたら、無制限にそれが遅延されるかもしれないからである。以前こんな論争があった。すなわち、過渡期の靈魂は墓に附着しているのか、それとも神主牌に附着しているのかと決定できないではないか、というものである。中国の宗教は、ばらばらで纏まりのない糸を織っているようなものである。時には、糸の端を繋いでしまうようなこともある。たとえば、定命論と「善には善の報いがあり」説とは、一見矛盾しているように見える。しかし、その後、最後の一分をそこで埋め合わせることによって、両者ともに何の不調和もなくなった。運命の中に、子供がいない老人や、善行を積むと妾が双子を産むといったこと、息が絶え絶えの人の寿命が10年、20年と延長されるとか、勉強のできない子どもが試験に合格する等等などがそれである。

良い死と悪い死

中国人には、異なる死に対しては異なる見方がある。訃報の中で典型的な言葉は、もっとも理想的な終わり方を表現するには、「寿終正寝（訳者注：お陀仏になる、母屋で寿命を終える、天寿を全うする等の意味）」がある。死の原因は純粋に年齢に関係している。そして、南向きの母屋で亡くなったら、それは明らかに一家の主人であることということも分かる。面倒を見る人がおり、声をあげて泣き悲しむ人もいる。中国人は、どのように死ぬのかについて非常に拘っているが、他方であるところではまた非常に無

頓着である。棺桶の頭のところには、いきいきとして美しい「呂布戏貂婵」を彫る。出棺する時、音楽隊は「蘇三不要泣」を演奏する。

中国人は、人が死んだ時、「仙逝」或いは「西逝（インドで釈迦牟尼の原籍に入る）」という。また、棺桶は「寿器」とも称する。このように力は籠っていない粉飾によって、一般の病死は比較的容易に受け止められる。だが、凶死（殺される、自殺、横死）は、依然として怖いものであると考えられている。良い死を得られない人には、輪廻の機会はないからである。その場合には、是非とも他の人が同様な不幸に出会って、彼の身代わりをしなければならないのである。したがって、急いで生きを受ける鬼は、その手段を選ばないのだ。人を自殺に誘惑したりする。誰かがよくない心境でいると、鬼はその人の自殺への可能性を見出そうとする。もし、当初その人が首を吊って死んだのであれば、鬼はその人の目の前に、紐の輪を掛けて吊るし、その輪の中にはまるでかわいい花園が見えるように工夫したりするのである。その人が頭をその中に伸ばすと、紐の輪がすぐに収縮するという仕掛けである。意外の死も同様の状態である。もし、ある車がある場所でぶつかって壊れたなら、その後も、その場所では他の車も続けてぶつかって壊れるといったことがよくある。「高橋の遊泳場」では、毎年溺死者が出ることで有名である。鬼たちは、まるで残酷な本能に支配されて、蜘蛛や猛獣のようである。

非人道的詐欺師

中国人にとっては、精霊の世界と下等生物とは相互に関連している。キツネのお化け、花の妖精、木の鬼魅などは、ともに人類の下に属するのであるが、本分を守らない。自然の進化階段を越えることをいつも妄想しているのである。旅行して人の身となるのである——もっとも羨ましい生存方式は、人類に他ならない。なぜなら、もっとも完全だからである。気骨のある動植物は、自身の貧困愚鈍に不満を感じ、切羽詰まって向こう見ずな行為をせざるを得ない。ほんの少しの人気を得るために、精気を盗むしかなくなる。彼らは美しい女性に化けて、男性の精液を吸収するのである。

人の世界と化け物の世界は、交錯し、連続し、相重なって、同一時空を占有している。そのため押し合いへし合う宇宙をもたらしている。弱い者

を苛めて強いものを恐れる幽霊と妖怪は、特に運が悪い人、身体が衰弱している人、元気がない人を誘惑する。しかし、運が良い人、正直な人、官吏の肩書きのある人に会おうと、避けていつも遠いところにいる。人々は、——社会的な制裁プラスあの世の制裁プラス無数の虎視眈眈、隙があればつけ入ろうと機会をうかがい、地位や財産を貪婪に走る精霊たちの——、極度に連合的で高圧な状況の中で生活している。けれども、思想ある人は化け物たちを怖がる必要はない。なぜなら、彼らは比較的軟弱で、暗く、希薄な一種の生存方式であるに過ぎないからである。亡くなった夫がいかに可哀そうな妻子の再婚を阻止する、といった物語はたくさんある。嫁を迎える籠の左右で、ウウと泣き、新婚夫婦の寝室では夜明けまで泣くのだが、それも無用なことである。神仙の生活はある面では完美であるけれども、ある種の人生には及ばない——比較的単調で制限があるものなのだ。

道教における天国

われわれの、道教の天国への唯一の道教的色彩では、きわめて豪華な建物、珍しい花、美しい玉がありながら、それは常に綺麗で清潔な空白の感覚を帯びており、それは「無為」に近い。このイメージのその他の部分は、すべて本土歴代の伝統を根拠としている。玉皇は直接無数の仙宮を統治し、間接的に人間と地獄を統治する。西方の、如来仏、紫竹林の観音および各勢力の諸大神に対して、玉皇は封建の主公でもある。もし地上の才女が早世すると、彼女は天宮の女官に選ばれる資格がある。天女が不注意から花瓶を壊したり、お辞儀をする時、笑って声を出したり、ふざけて捕まえられた時には、俗世に落とされてしまう。そして、その俗世では恋愛、苦難を受けることになる。そうやってさまざまな民間伝承物語のもとを作り出している。天国の中で永久に繰り返し広げられるこのような楽しみを、一時的に中断したとしても不愉快なことでもないようだ。

天国の行政府は、極端な分業制を実施している。文人の神、武人の神、財神、寿老人（訳者注：老人星）があり、地上では、城郭ごとに城隍があり、村ごとに土地の神様がいる。家ごとに二つの門神と一つの竈神がいる。湖と河ごとには龍王がいる。その以外にも、無職であるが分散して存在する仙人たちもいる。

遠慮なく神霊を冒瀆すること

中国の天国は、格局は偉大ではあるけれども、地獄に比べると蒼白で光もなく、線も明確ではないように見える。天国は地獄とまったく異なるからである。さすがに、天国は人の群れとは関係はないが、たとえ中国人が天国を大切に考えていないのだとしても、彼らはいつでもそれを信じる時にはしっかり信じる。中国人の理想へ向かう力は、確かに驚くほど強靱である。一つ例をあげてみよう。ラジオの紹興の劇では、恋人ふたりは、何回も何回も再会について言い続ける。涙を浮かべながらこう叫ぶのである。「賢妹（訳者注：かつての同輩や目下の者に対する敬称）、ああ！」「梁兄（訳者注：梁山伯与祝英台）ああ！」報告者は、弦子（訳者注：蛇皮線——三弦の通称）を調合するのを見張って、入ってくる——「安南路慈厚北里13号3楼王公館毒特霊（訳者注：薬の名前）を一本——、すぐ送り届けよ！」とはいえ、劇の雰囲気は絶対に壊されてはいないのだ。

なぜなら、中国人は反クライマックスにはあまり敏感ではないからである。中国の宗教は、気ままに冒瀆されても、耐えうるのである。「玉皇大帝」とは、特に気迫のある夫人の代名詞でもある。敬虔と冗談の間に、境界線はあまり明確ではない。諸神の中には王母がいる。彼女が中国神話の中に最初にあらわれた時には、非常に醜い姿であったが、その後、一人の華美なお夫人として粉飾されるようになった。そして、麻姑（訳者注：中国古代の女仙人）八仙の中の一人となっている。この二人はともに、誕生祝い宴会のよい飾り付けとなるのだが、信仰の対象ではない。しかし、中国人は、彼女たちと観音さまとを一緒に、対等に、扱うことに反対したりしない。外国人であったら、サンタクロースと神（訳者注：ヤーウェ（エホバ））とが交際していることなど想像できないであろう。

最低制限の救済

中国人にとって、「霊魂の救済」は、人によって異なっている。一連の尽きることのない世俗生活を満喫している人にとって、根本的に「救済の需要はない」。事を処理する時、人情と道理を超えなければ、人間に生まれ変われないような大きな間違いを犯すことはないからである。

ある人々は、現実生活の苦難を見て、比較的気に入る環境を創造したい

と考えるのであるが、その場合、ほとんどは、仏教の方式を採用する。沈黙、孤独、不動である。この影響を受けた中国人には、大きく二種類に分けることができる。一つは、老年で退職した官吏、年寄りの夫人、寡婦、夫の心を得ない妻子といった、比較的安静な信徒たちで、彼らは自分を小屋に閉じ込め、理解したくもない経文を写している。世事と断絶し悪いことをする機会をなくすことによって、消極的な善をもたらすのである。来世は比較的良い環境で修行でき、世俗快樂を多めに享受できる。完全に世事と断絶することは、往々にしてできるものではない。大いに譲歩するしかない。たとえば、精進料理を食べることはただ単に殺生の罪を減らすのではあるが、もし、煮たり焼いたりした食べ物をも食べないという極端にまで進行すれば、さらなる積極的な価値がある。長年果物しか食べないでいれば、きっといつかは全身白毛が生えることになってしまうだろう。猿仙に化し、跳躍していく。しかし、中国で肉類を断つ人は、肉からは離れがたいので、「素鶏（訳者注：精進料理で湯葉をニワトリの肉に似せて作ったもの）」、「素火腿（訳者注：精進料理で湯葉を重ねてハムの形にしたもの）」を発明した。さらに良い発明として、「花素（訳者注：つまり、日を定めることなく精進料理を食べること）」を食べる制度がある。「精進料理」を食べるのは、旧暦の初日、十五日或いは菩薩の誕生日などに限る。敬虔な中国人は、浮世を離れて、実社会に入ること、ひとつ足を踏み出したり踏み入ったりすることは、地下にいる書記官が、きっと忠実に、寸毎に、分毎に、退職した記録をしているのだと考えているのである。

世の中を救う仕事の体育化

動くことが好きな若者は、少し世に出て知識と権力を求め、再び戻ってくる時には、きっと、暴虐を取り除き、善良な民を安んじ、社会を改造できる。彼らは、続けて静かに数時間座り、胸中に何の雑念も生じさせない。黎明と半夜の時、彼らは深呼吸し運動する。日月精華を吸収し、超人の「浩然（訳者注：正大で鋼直な精神）の気」の発展を助ける。中国人にとって、体操は常に微妙な道義精神を帯びている。「気を養う」、「気を鍛える」とことと関係がある。拳法家の技巧と隠遁者の内心の平和は、互いに補完し合うことによって、結果が一層よくなるのである。

中国にも西洋少年団と同等に地位づけられる物語や小説があり、——このように道中拳術の練習をして天国に入るという主題は、中国の冒険小説の中心となる思想である——。読者は学生、学徒以外にもたくさんの大人がいる。本の中の侠客たちは、天にかわって自分の正義を遂行する前に、まず山の中で拳術、刀法、戦略を学ぶ。人生を改善するには、まず、人生と隔絶しなければならない。この観念は、武俠小説を読まない人々の中にも根深く存在する。

不必要な天国

ただ単に現実を改良するだけでは、不足であると人は思う。さらに、もっと一層上昇しなければならない。多くの人は仙人になりたいのだが、神にはなりたくない。なぜなら、神様の肩書きは、功績と功德の報酬であるが、貰うと面倒で、その後は天国の官僚にならなくてはならないばかりか、そこにはたくさんの職業上の責任が伴っている。ある清廉の県長がなくなって、もし人々が彼のために一つの廟を造ってあげることになるのなら、彼は自然に神様になる。特に貞潔な女性は、自らの廟がある。彼女たちが、その地方での愛護を継続的に享受できるかどうかは、田畑の収穫や天気および個人の禱りにどれほど責任をもっているのかがどうかで決まるのである。

源に発する道教の仙人は比較的羨ましい存在である。彼らは名士派の生活を送っている。林語堂が提唱するささやかな楽しみはすべて整っている。仙人の出自については、半世紀以上のインド式苦修が重要であるが、インド隠士が行うような肉体に対する凌辱はない。偏って走る人は、煉丹（訳者注：道士が辰砂などで不老長生の丹薬を作ること）することができる。仙人は流浪する僧に扮装して、上の方からの推薦にも頼りながら、慧根のある人を選び、二言三語で彼を目覚めさせ、二人一緒に失踪する。五十年後に彼の古い知り合いが異郷で彼に会っても、ひげは相変わらず黒いのである。

ある人の名前が仙人の籍に入ったのは、まったく運が良かったからに過ぎない。神学を研究して相当な修養のある狐精は、自分の呼吸をひとつの光球のように凝って、月が出る夜、その球を空中に投げ出し、吐納の練習

をする。人はチャンスを睨んで、この球を捕まえ即時に飲み込み、この狐の終身事業がこれで終了する。獣類は長生を求めるが、まず、人の段階を経なければならない。そして、人よりも長い道のりを辿らなければならない。したがって、度々、途中で強盗に襲われ、苦勞して行く道を失う。

生活に絶対的な保障のある仙人は、薄っぺらな享樂、たとえば、囲碁、飲酒、遊行などで時間を消耗する。彼らはもう一つの平面の時間の中で生存している。仙人たちの一日は世の中の千年に等しい。これはあまり良いことではない。われわれの神経より無頓着なだけである。

仙人は性生活や家庭の楽しみはない。そこで人々は両棲類生物である「地仙」を創造した。地仙とは長生不老以外に、普通の地主と何の違いもない。人跡のない谷、島嶼の中に地仙の住宅がある。そこには、イスラームの楽園と同じように、黒い目の侍女がたくさんいる。とはいえ、それほど大衆化したものではない。時々人の群と接触し、地位が優越していることにさらなる愉快を感じるのである。その物語の中の人々のように、地仙を婿に迎え入れ、遊覧船に乗り、洞庭湖上で古い友人に会い、彼らを船に乗せ、酒を飲ませる。彼にたくさんの宝石をあげるのである。友人は船から降りると、女子楽隊が鼓を敲いて、白い霧が上がり、遊覧船は見えなくなる。

仙人たちは、何の束縛もなく彼らの財富を享受して楽しんでいる。けれども、この責任のない生活の中で、彼は人と付き合い、物事に接する技術を行使するチャンスはない。この技術は、その訓練にはかなりの苦痛が伴うにもかかわらず、中国人の特長である。甘んじないでいるが、放棄することもできないのである。したがって、中国人の仙境に対する態度は、非常にはっきりしないことになる。半分は好み半分は憎いのである。

中国人の天国は、実際は余計なものではない。大多数の人々にとって、地獄は十分によいところである。彼らの品行があまりにも悪いものでなければ、彼らは一連の無限の、おおよそ同じような人生であることを予期できる。ここで彼らは前縁を實踐するのである。無心の中にはまた未来の縁をまき、恨みをまき、恨みを解くわけである。原因と結果は幾重にも重なり編みあって、まるで竹で編んだ席のようになっている。それを見るとめまいがする。中国人は、とりわけ人生この一面を愛する。好きになると手放せない。中国人の性格はいつもこのようなものなのである。映画『万世

流芳』で京劇として編集されている。『秋海棠』¹といった小説は、舞台劇、紹興劇、滑稽劇、弾詞（訳者注：江蘇省・浙江省で広く行われている物語の一種、またはその台本。三弦・琵琶、月琴などに）合わせて歌いかつ語るもの）、申曲（訳者注：上海市あたりの劇）に編集し、一部分忠心の観客たちは見る。中国の楽曲は、そのタイトルは、『平沙落雁』あるいは『漢宮秋』である。永遠に同じ調子を何回も繰り返して、気持を落ち着け冷静な態度を取って、囁んで味わいを深くする。クライマックスはなく、終わりもない。終わってから別な調子を使ってまた始まる。

中国人にとっての“悪”

17世紀ローマ派の神父は、中国にやって来て、天朝（中国歴代王朝の自称）道徳水準の高さを観察して驚いた。宗教がないにもかかわらず、道徳紀律がこのように普及しているのはなぜなのか、彼らには思い至らなかったであろう。しかし、初恋のようにきらきら光る憧憬は、ついに色褪せている。大隊で入って来た西洋の商人たちは、接触した中国人が皆、陰でこそこそして、気骨が全くない詐欺師のように思えるのである。中国人は、初めてあった時に良く見えたように、良き人なのであろうか。

中国人は、にこにこ笑って「この子は本当に悪い」と言うが、実は彼の聡明さを褒めているのである。「正直で温厚なものは無用の代名詞である」。同時に、中国人は、自分の子どもがあまりにも賢いと、ちょっと気にかかる。才能をひけらかすのは危険である。愚鈍な人には、愚鈍の福がある。愚かだけでなく愚かであるかのように偽装しなければならない。一般の人たちは、彼らに足りないものを特に重視するのである。『旧約』時代のユダヤ民族の宗教感が早く生まれたのは、彼らが生まれつき淫を好むからである。中国人は、生まれつき小さいところを欲張る。ちっぽけな利益を独占したいのである。したがって、「戒めるは得るため」の反応なのである。これがかえって愚かさを奨励することになった。

中国人は偽善者ではない。真面目に性善論を信じている。まったく反社会的で利己的な本能は、何れも本能の数には入らない。このように主観的

1 『秋海棠』は言情小説、鴛鴦胡蝶派の作家、秦瘦鷗の著。

中国人の宗教

に分類するのは、道徳教育をめぐっては、非常に有効である。誰もが異常だとは言われたくないからである。

しかし、あまりにも高い人性に保持しているのは、やはり煩わしいことである。したがって、中国人はいつも、「身を持するのは難しい」と不平をこぼす。この「する」という字は創造、模擬、扮するという意味があり、骨が折れる感覚あるのだ。

努力の結果、中国人は西洋人より道徳のある民族に発展しえた。いささかの政治生活も終始経験したことがない、最も滅茶苦茶な市民であっても、政治生活の面から中国人を判断するのは不公平である。中国人は、家庭の中や友達の間では、いつもとても親切で、克己である。どんなに小さな事でも、道徳上の配慮をしなければならない。わがままに振る舞うことのできる老年まで生きられる人は、ごくすくない。

そのような心理教育に深入りして、中国人の行為を分析する際、何が訓練となるのか？何が本性なのかを見分けることは難しい。夏に、痧薬水（訳者注：コレラ・暑気当たり・ジフテリアなどの急性病）を施す寄付金は、何人も横領することはできない。しかし、石菩薩の頭を一つひとつ削り取って外国人に売ることは、たいしたことではない。知識のない群衆に対しては、抽象的な道徳観念の方が具体的な偶像崇拜よりも力があるのだ。これは、すこぶる特殊な現象である。

儒教は、徹底的に理解しようとはしない読書人に、一切を配した。だが、好奇心旺盛な愚民は、思わず宇宙の秘密を伺い探る。本土の、舶来の伝説の断片は、系統的、人情的にアレンジされた後、儒教の制裁は、中国人の幻想の最も果てしなく広い辺境にまで伸び広げられた。この宗教は、体裁は整ってはいないが、幸いにして儒教に少しの顔色と体質を与えた。中国の超自然世界は荒れ果てて蒼白的である。それとは対照的にさらなる人生の豊かさと自足を表現しているのである。

中国にある外国の宗教

カトリック教の神（上帝）、聖母、イエスについて、中国人は、とても容易に彼らの血統関係と統治権を理解しうる。聖母には、さらにある種はるかに遠い異常な艶がある。中国本地の神様より吸引力がある。しかし、

究極において、彼女の黄色い髪には隔たりがある。たとえばあるクリスマスカードは彼女に中国式の古い衣装を着せ、黄色い髪の上にマントをかぶせているのだが、やはりいけない。この三位の下に、またたくさんの小さな聖人がいる。それぞれ、覚えにくい名前、歴史的背景、特徴と事績がある。ある一群の神様が、別のある一群の神様にとって代わったりする。それも、虚無あるいは単独のひとりの神様にとって代わった方が、比較的容易である。したがって、カトリックは、中国では組織的には厳密であるけれども、プロテスタントと敵対することは相変わらずできない。

キリスト教の神様と信徒とは、個人的な関係が発生する。それは愛の関係である。中国の神様は、従来公の事は私情にとらわれず公平に処理し、愛には言及しない。きみが前生に犯した罪は、今生のきみは茫然と知らなくても、彼らはきみに責任を持たせる。天罰が行う時は、時には卑劣なトリックである。たとえば、7人の婿の中のひとりのように、夢の中で7人は赤い紐に結ばれて、不吉な兆しだと疑い、そこから、彼の姉妹の婿同士を見るたびに、彼らを避けるようになる。悪ふざけをする親戚たちは、わざと無理やり彼らを一緒に一つの部屋に閉じ込め、酒を飲ませ、ドアに錠を掛け、部屋が失火して、7人の婿は、一緒に焼けて死ぬ。この夢は、神様が、特別にそこ派遣され、彼を誘惑したのである。

現代中国映画と文学は、肯定的な善を表現する場合、その善はいつもキリスト教宣教師の雰囲気を持っている。キリスト教の中国生活への影響も見られる。模範的な中国人は落ち着いて微笑んでいる。勇敢で愉快地、200年前の服装を着て、夫人を師母と称し、女性は編み物をし、子供はピアノで『101の最もよい歌』を奏いている。女性作家たちは、すぐに礼拝堂の晩鐘と床に跪いて、時の抒情の美を捕まえていた。流行雑誌の小説の中でよくある女主人公は、孤児院を建立し、彼女の過去の愛人を記念する。こうした物語は興味あるはずである。なぜなら、彼らは一般的な教育を受けたことのある妻や母親の魂が、飛び回るかを表わしているからである。

教会学校の学生は、ちょっと影響されやすい年頃である。よく賛美詩と教会と荘厳、紀律、青春的な理想とを、一つに結びつけてしまう。この態度は、たとえ、かれらが一生、洗礼をうけなかったにしても、ずっと成人になっても保持される。若い革命者は、固有な宗教を敵視するが、キリス

中国人の宗教

トには別に反対はしない。なぜなら、キリスト教に付随するのは、病院、化学実験室だからである。

映画『人海慈航』の中には、一組の夫妻がいて、夫は取引所で金と精力を投げ捨てているが、妻は医師として人々のために奉仕するといった場面がある。時間のある時は、子どもも付き添って、嬉しくてうきうきしながら、地下室で化学試験に従事しているのである。『人海慈航』は、中国映画であり、このように途切れなく、優れた行いをしていくと場面が、二十分以上も流れている映画としては唯一である。普通、映画の中での善は、ただ慌ただしいちらりに過ぎないのではあるが、それは暗黒面との対照と見なされている。

古い中国では、一切肯定的な善は、人との関係の中から得られるものである。儒教政府の最高の理想は、せいぜい親戚や友情と調和がとれる状態で發揮して行く十分な食糧供給と治安の維持にすぎない。近代の中国人は、突然、家庭は封建的な悪い力や悪事の残存勢力であることを悟ったのである。父親は専制魔王であって、母親は好意の愚かな人である。モダンな妻は、慰みものであって、田舎癖な妻は、お祭りするテーブルの上の肉である。一切の基本的な関係は、このようなたくさんの攻撃を経過しつつ、中国人は西洋人のように気持ちが窮屈で、疑い深くなったのである。これは中国人にとっては特に苦痛である。なぜなら、彼らは人との関係以外に別の信仰はないからだ。

したがって、現代の中国人が善を描写する際に、困難を感じるのはごく当たり前である。小説や劇の男女の主人公は、間違った道に踏み誤ってから、光明へ向かう時期を何とかやり遂げると、即座に物語は完了する。批評家がいかに鞭打って罵声を浴びせかけても、完了しなければならないわけである。

なぜなら、生活はもともとあまりよくないので、現在のわれわれには生活以外にも一つの目標が必要だからだ。去年の『新聞報』には、ある活動的なキリスト教徒が、キリスト教を道具として利用し目標を借りても良い、と可哀そうなことを言っていたのが載っている。

しかし、キリスト教には、中国ではとても無視できない弱点がある。キリスト教では、神が七日間で（あるいは億万年の進化順序を経過して）、

われわれのために宇宙を創造したことに感謝するのであるが、これと中国人の言う盤古の天地開闢とは、あまり関係がないのである。中国人は、僅か第五代目までについて遡及するだけで、五代目以上の先人は先祖を祭る宴席上には乗らないのだ。なぜなら、中国人は、親しい人と親しくない人とを緻密に区別するからである。家系図を重んずるけれども、かえって、生命最初の根源については、たいした関心はない。第一に父母を愛する。父母の遠い前の先祖に当たる、創造者の番になると、その愛は当然さらに薄められてしまうのである。

教育を受けた中国人は、ヨーロッパ学術の主流の擁護がある以上、ダーウィンの考えは確かに正しいと考えている。とはいえ、もしもダーウィンの理論はまちがっていると実証され、一旦その消息が伝わって来れば、中国人は、ただちに少しの苦痛もなく、その理論を放棄する。今まで中国人は、真面目に猿が自分の祖先だと思ったことはないし、ましてや、この世の一切は、すべて歴史の黎明の前から発生しているのであり、世界が始められた時すでに、黄帝はわれわれと何の違いもない人々を統治していたのである。それも、われわれよりもう少し文明的な人々であった。中国人の考える歴史は、長期に亘る平均的な退化に他ならないのであって、進化的なのではない。したがって、彼らは聖賢を評論し、時代の先後を標準とする。地位は古ければ古いほど高くなるのである。

生命の起源についての興味はない。と同時に、世界の終末については、想像すらできない。ヨーロッパの暗黒の時代、最後の審判のイメージは、大衆の幻想の中で鮮明かつ丁寧に与えられていた。もしかしたら、ローマ帝国の崩壊が、精神的打撃を与えたのかもしれない。世界の終末は紀元1000年にやってくると信じられていた。中国は、断然なく展開する歴史過程の中で、そのような挫折を経過したことがそもそもない。したがって、中国人は、歴史が歩んだのは竹節運であると考えている。一つの切れ目の太平の日々があり、また一つの切れ目の災難がやって来るのであり、永遠にそれが繰り返されるのである。

中国人の宗教において、人をはかる標準は、従来、行為なのであって信仰ではない。社会の最高級の人々は、ほとんど皆、宗教を信じてはいない。それによる刑罰はあまり重くないと同時に、賞金もたいして誘惑にはなら

中国人の宗教

ない。信徒たちは大半消極的な態度を取って、処罰を避けることだけを求める。中国人は、長年の習慣を踏襲して、いつもそれなりの方法を考えて、責任を回避する。キリスト教で、ひとつの「贖罪の子羊」を捧げるのは、考え及ばないことであった。無代価で一切の責任を負担するのである。あなたは信じるだけでよいのだ。値段の掛け合いに慣れている中国人は、かえって大いに疑い深い。

しかし、中国人がキリスト教を信じるに当たって生じる最大の困難は、キリスト教の描く来生が、中国人のいなくともとはちがうことにある。比較的旧式のキリスト教の天国のイメージでは、そこに終わりはなく休憩もなく、金のハーブを弾いて昇天の徳を讃えている。それについてわれわれはひとまず何にもいわないでおこう。比較的先進的な理想として、地球を一つの道徳のグラウンドと見なして、われわれはここで訓練を積んだ後、もうひとつ渺茫な世界に登って、大いに才能を発揮し貢献するという考え方もある。これも受容することはできない。自己中心的で、保守的なわれわれ中国人についていえば、いままでずっと、われわれ自身の人生を、宇宙の中心と見なしてきたからである。人生は大我の潮流の中の暫しの泡であることを言うに当たって、キリスト教の天国のような無個性の永遠を生きることにもあまり意義がないのである。キリスト教は、われわれにわずかな慰めしか与えてくれないのだ。したがって、中国におけるさまざまな伝説は、新旧キリスト教の高圧的な宣教に対抗し、また踏みとどまることを可能にする。中国の伝説は、反撃するでもなく、大規模な資本の支持もなく、プロパガンダの文学もなく、優美平和な背景、そして一冊の経書ですらない。仏教の経典もそれを理解できる人は極めて少ないので、存在していないに等しいのである。

推測不可能な中国的心

中国人の宗教は果たして宗教であるといえるのか。宗教であれば、一種敬虔で誠実な信仰であるべきであろう。下層階級は、宗教を信仰した方が比較的安全だと考える。なぜなら、もし後になってそれが完全な嘘であると発見されたとしても何の妨碍もないが、無神論者なら、どうやら必要ではない地獄へいく危険を冒すことになるからである。これは中国人が外教

の伝統的で寛容な態度を解釈した一つの結果である。いわれなく、キリスト教徒を犯すことは、将来万一キリスト教の地獄へ落ちるような時に、一人他郷にあって親しい人が一人もいないなら、損をすることになるわけである。

しかし、無論どんなに曖昧で、どちらにもとれるようにするにしても、宗教の中には、外交辞令で誤魔化すことなく、必ず「はい」あるいは「いいえ」と言わなければならないことがある。

たとえば、ある人がすべてを失った場合、ただ、内在的に支持されることによって、やっと奮起することが可能なのであり、それこそがもう一つの前途を創造する。だが、中国では、このような事例はあまり見かけない。「苦勞（苦しみ）の中の苦勞（苦しみ）を耐えられれば、（まさに）人の中の人になれる」。いったん人の上に立ち再び転ぶと、もう這いあがらないのである。それは、中国新聞の文芸・学芸欄（特集ページ）に、たいてい2日おきに、Edison（1847-1931）あるいはFranklin（1706-1790）の「失敗は成功の母」という教訓が掲載されていることからも分かる。

中国人が敗北を認める時には、場合によっては自信はまだある。彼は、したいことはよいことであるかもしれないが、たまたま時宜に合わないのであると考え。神は従来失敗者を助けたりしない。中国の知識人の「天」と現代思想の中の「自然」とは互いにびったり合っている。偉大なる、それ自身の無情の道を歩んでいる。ただ、キリスト教の慈愛の神とは無関係である。平民の宗教も士人の天の影響を受けている。罪があればかならず罰が来る。犯罪は自然の推行を妨害したから起こるのであるが、孤独の中の一件の善は、必ずしも奨賞を得るとは限らないのである。

「天に袋小路はない（訳者注：自然の成り行きに従って行動すれば道はおのずと開けるものだ）」とは言われているが、真に乞食に落ちぶれている場合、後れを取り戻して立ち直る機会は何もない。絶境の中の中国人には、何が彼らをささえるものなのであろうか。前世で罪を犯した報いである、と宗教は彼らに教える。それ以外に、何の慰めも与えないのであろうか。

乞食は人間ではない。なぜなら、儒教の中では人生の範囲には非常に限りがあり、人の資格で最も重要な条件は、人と人の関係である。しかし、これらの関係も五倫の中に制限されている。あまりにも貧しい人は、儒教

中国人の宗教

を奉ずることはできないのである。なぜなら、彼はまず、一家を養うことができ、社会の要求に適応できる、少しの金銭と田畑を仮にどうしても持たなければならぬ。乞食は、人に請い求めることを除いて、家庭あるいはいかなる人と人との関係をもちえない。これは個人の道徳を損なうものであり、乞食は宗教の保護の外へと駆逐されたのである。

貧しい人と赤貧の人とも異なる。世界各国には、従来、下層階級を最も敬虔な人々であるとしている。なぜなら、彼らは比較的に来生で報われることを熱心に信じているからである。しかし、中国の下層階級はぎっしり詰め込まれて住んでいるので、更に雑多な人の関係、制限、責任が生じる。さらには、親切にも、中国人の宗教の背景の中の、神・鬼・人が、押し合い押し合いしており、刻々偵察される状況にある。

死にそんな人も人ではない、苦痛と拡大の自我び感覚は、人と人の関係を切断されているからである。同情が足りないので、中国では臨終の病人の心境は、終始発掘されることはない。すべての中国文学は、この点に触れると、いつも傍観者の反応に限られていくのである。つねに肝心なことがまったくない風刺と滑稽に流されてしまう。あの「無常」とよばれる鬼警察のように、高い帽子の上に「我に富を増やせ」と書かれている一人白衣の道化役者でしかない。

生命の経緯にまったく興味のない中国人には、たとえ多少それに興味を感じたとしても、大胆に考えていくことはできない。思想が人性の範囲の外に漂うのは常に危険である。邪悪な勢力（幽霊と妖怪）は、隙を見て入ってくる。彼らを引き込まない方がよいのである。中国人は、彼らの眼前にある、紅灯照の中の人生の小さい一部分である、賑やかで明白なことに注目を集中している。この範囲の中においてのみ、中国人の宗教は有効である。その以外には、ただ、不確定な、どこにでもある悲しみにすぎない。すべては空っぽである。閻惜姣²がいうように「手を洗って、爪を清潔にし、靴を作って泥を踏む」、のである。

2 水滸劇『坐樓殺惜』の中の女主人公。

中国人の宗教(解題)：

張愛玲は1920年上海で生まれた。父方の祖父は、東征論(日本討伐論)を上奏していたこともある清末の高級官僚張佩綸であり、祖母は、ももとは張佩綸の能力を高く評価していた李鴻章の娘という、名家の出であった。日中戦争期に有名になった。それは同時に張愛玲が最も多く作品を書き、発表していた時期でもあった。1943年、汪兆銘の偽政府幹部の胡蘭成と知り合い翌年結婚したが、1947年には離婚している。1952年に上海を去って香港に居を移し、1950年代後半にはさらにアメリカに渡った。その後、30歳年上のアメリカ人左翼作家で熱狂的なマルクス主義者、映画脚本家であるフェルディナンド・ライハー(Ferdinand Reyher)と二度目の結婚し、1967年死別している。

かつて汪精衛政府要人であった夫の問題も影響し、長い間、彼女の名前は、中国文学史上のタブーとなっていた。60年代もしくは70年代から、イェール大学夏志清教授の論文により、彼女は再び注目されるようになった。「中国近代小説家の中において、張愛玲は魯迅と同様に重要である」と夏氏は評価している(『現代中国小説史』[原著: *A History of modern Chinese Fiction*]、イェール大学出版社、1961年)。また、張愛玲の作品「金鎖記」は、「中国史上最も偉大な中篇小説」と賞賛され、描写されたその女主人公のイメージは、「中国文学の画廊に彫り刻むに足るもの」と評価されている。

近年、張愛玲研究は、中国台湾から大陸へと移行しながらもなお盛んである。張ブームは衰えることなく、その作品は映画やテレビドラマにも再現されている。現在、私が博士後研究員を務めている復旦大学でも、毎学期「張愛玲研究」講義が開講され、朝1時限目の講義であるにもかかわらず盛況で、その人気ぶりをうかがうことが出来る。夥しい研究論文の他に、佚文の発掘も盛んである。たとえば、『小团圆』、『易経』、『雷峰塔』などの作品が、最近新たに公表出版されている。

私も、大勢の張愛玲作品愛読者のうちの、一人の「張愛玲魔一麗」である。16歳の時、偶然、彼女の作品集『伝奇』を上海市街の道端にあった書報亭で見つけ、購入して読んで以来、長年その作品世界に親しみ、すでに生活の一部になってしまったかのような感もある。

80年代後半以降、日本でも張愛玲作品の熱心な研究者や読者が現れており、管見するところ、彼女の作品の日本語訳には以下のようなものがある。エッセイでは、『私語』(1991)、『尽余録』(1991)、『到底是上海人』(1992)、『洋人看京劇及其他』(1992)、小説では、『赤地之恋』(1955)、『秧歌』(1956)、『封鎖』(1991)、『傾城之恋』(1995)、『留情』(1995)、『金鎖記』(1995)、『色・戒』(2007)、『多少恨』(2007)、『浮花浪蕊』(2007)、『相見歡』(2007)。日本では張愛玲読者は、残念なことに未だ多いとはいえ、魯迅ほどに広く知られた作家でもない。

この「中国人の宗教」は、張が22歳の頃、ナチスドイツが上海で出版していた『二十世紀』という月刊英語雑誌(“*Demons and Fairies [Beliefs of Chinese people[s]] THE XXth CENTURY*, vol.V,no.6,Shanghai,December,1943,pp.421-429.)に掲載された。張は、他にも「更衣記」「洋人看京劇及其他」等を英語でこの雑誌に発表していた(呂澍・王維江『上海的德国文化地図』上海錦綉文章出版社2011年p.109、*THE XXth CENTURY* 原文は<http://libweb.hawaii.edu/libdept/russian/XX/index.html> 参照)。後に、自ら中国語に翻訳し、1944年、上海にあった月刊誌『天地』に三回に分けて(第十一期八月、第十二期九月、第十三期十月)発表された(本翻訳はそれを再録した張著作集諸本に拠っている)。

「中国人の宗教」冒頭にあるように、これは外国人のために書かれた教科書のようなエッセイである。学術的で厳密な研究論文ではなく、完全に彼女の自分自身の思うところを記しているのであるが、中国人の宗教に対する一般通念をよく捉えて表現している。「宗教」という意識そのものが非中国的であること、換言すれば、「宗教」概念の極めて西歐的性格をよく看取しており、実に卓越したエッセイであると判断し、このように翻訳した次第である。(徐青記)